細胞検査士の二つの顔

福山臨床検査センター　　今田　啓

一般的にいって細胞検査士として必要なことは、やはり標本中に癌細胞があるかどうか予測を立てることです。それはミステリー小説のトリックを考えることに少し似ています。例えば年齢、性別、症状、主治医の臨床診断などの情報を頭に入れて、癌だとすれば何に当たるかと考えるのが日ごろの仕事です。一枚の標本を顕微鏡で見て、毎回犯人を突き止めなくてはなりません。そして、犯人の癌を逮捕して判決を下すのが指導医の役割になります。だから細胞検査士に必要な能力である推理力は、常に磨いておかなくてはなりません。そういう心づもりでいますと、自然に何かの推測を立てるのが習慣になったりします。これは職業病みたいなものかもしれません。だって、何でもかんでも推理することに気が入っちゃって、困ったことにもなりかねません。ほんの小さなことから大げさな結論を導き出すというのは、世間では誇大妄想といいます。

こんな私が細胞検査士の他に情熱を傾けていることがあります。それは小説を書くことです。四年前には文芸社から「水辺の神々・断片」という小説を出版しました。内容は第二次大戦の日本軍のことで、満州からシンガポール、そしてスマトラ島での終戦から捕虜収容所内のことなどです。主人公は憲兵隊の人たちで、現在の私たちには想像もできない体験だったのだなと、書いた私が思います。本当に感動ものです。その他に私が書き溜めた作品をたまに読み返して、自分自身で「面白いなあ」と感心しています。他の作家の作品で私が読んで面白いと思うものは、やはり「ピノキオ」です。自分自身は年を食っちゃいましたけど、あれが一番ですね。他には「四人の托鉢僧の物語」とか芥川の「奇怪な再会」などがありますが、小説以外も読むのは好きで、宮本常一さんの著作で「忘れられた

日本人」なんかは面白いと思います。その他に小説を書くために資料として読むもので面白いものは沢山あります。

私がどうしても書きたい作品としては、邪馬台国（やまたいこく）のことがあります。日本の国が生まれる前史に韓人や漢人や倭人たちがそれぞれ懸命に生きる道を探して、その結果、一つのまとまりが出来たのだと、それがテーマです。そういう志は高いものの、これがなかなか難しい。書き始めてはみたものの、三年が過ぎても神武天皇さえ登場しないというのですから、いつになったら卑弥呼が登場するのやら、見当もつきません。それでも邪馬台国論というのはおおよそ出来上がってはいるのですがね。

邪馬台国の所在地で有力なものとしては、北部九州説と畿内大和説の二つが大きく分かれています。これは皆さんよくご存知でしょう。それぞれに論拠があって、なかなかどちらが正しいとも言い切れません。まあ、どちらでも良いようなものですが、私なんかは小説的に迫りたいということで、第三の候補地を設定したいと思っています。そこが絶対正しいなんて主張するつもりはないのですが、今は魅力的な第三の説が求められていると思うのです。小説的にというので、専門家の方のようには論を進めませんが、人の生きた記憶のようなものが書ければ良いと願っています。だから私の説に欠陥が多いからといって、あまりつっこまないで下さい。

私が書くのは細胞診の仕事の通りに進めています。つまり、細心な資料収集と大胆な推理ということですね。私が注目する資料としては、やはり記紀などの日本神話を基本にしたいと考えています。その方が面白いですもんね。その中で注目するのは、神功皇后（じんぐうこうごう）の記事の中にある中国からの遣使のことです。神話の中でここに伝承があるということは、

やはり何かの基礎資料があったと考えています。神功皇后の伝承が日本神話に組み込まれたのは継体天皇の時代だと思われ、これにも注目しています。神功皇后の先祖の中に天の日鉾というのがあり、それに関連した巫女が卑弥呼ではなかったかと推定しています。卑弥呼には従う婢が千人居たといますから、大勢の巫女が祭礼などで集まることがあったかもしれません。つまり巫女のような女性が多く集まった伝承のある場所こそが、有力な卑弥呼の住所ということになります。それを日本神話の中から探すとすると、京都府の乙訓郡あたりが有力だと考えています。ここは堕国といわれていたようで、垂仁天皇の妃に丹波から来た女性たちの中で、美しくない人が本国に返される途中で輿から落ちたという地名起源があるといいます。もちろんこれはこじつけで、高貴な女性に何か縁のある土地だったということぐらいしか読み取れません。堕国というのも似たような地名のもじりでしょうし、私は本来ここが壱国という地名だったという可能性を探りたいと思います。山背の壱国、つまり邪馬壱国というのがもともとあった国の名前だと考えたことがあります。壱国がなまって堕国、さらに乙訓になったという推理ですね。ここのところは正直、こじつけかなと思うところがあります。しかし、この近くには弥生時代に大きな湖があって、水運に便利な土地でした。さらに、淀川を少し下れば銅鐸の鋳型が多く出土していて、青銅の鍛冶師が活躍したであろう東奈良遺跡も近いです。このあたりは弥生時代に日本の最重要工業地帯でもあった訳ですね。また、この付近には高地性集落が多く、それだけ政治的に緊張があった地域だと考えられています。高地性集落の防御網に守られた地点が、乙訓郡内のどこかにあったでしょう。

ついでに狗奴国(くなこく)のことについても少し説明を加えておきます。そこには卑弥弓呼(ひみきゅうこ)という国王が居たとあります。卑というのは日(ひ)とか霊(ひ)とかいう意味らしく、接頭語でしょう。弥弓呼(みきゅうこ)というのはどうも巻向(まきむく)という地名に関連があるらしく、狗奴国を私は奈良盆地の南部に求めています。巻向(まきむく)というのは崇神天皇(すじんてんのう)のおくり名であるミマキイリヒコにも関連のある地名だと思っています。そうすると当時の状況を想像すると、次のようになります。乙訓郡あたりに居た卑弥呼と邪馬壱国王と、これに対するのが巻向に居た卑弥弓呼王とその巫女ということですね。そうすると狗奴国がわの巫女は、有名な倭迹迹日百襲姫(やまとととびももそひめ)のことが有力になります。当時の戦は呪術どうしの戦いでもありましたし、二人の対決を見たかったと思います。

以上、私が探した邪馬台国のあらましです。この問題には必ず反論があるはずですし、細胞診のカンファランスのようなものと思えば良いでしょう。異なった意見を出し合って議論が盛り上がることが良いと思いますし、その結果何かが得られると期待されます。その点で私は、これからも第三の説でどこまでたどり着くことができるのか、挑戦し続けたいと思います。これまでの説だけではちょっと盛り上がりに欠けるところがありますから。

邪馬台国地図

著者